天の父母様の陽性と陰性の二性性相に関する再考察

鮮文大学校　黄珍修

１．はじめに
２．陽性と陰性の二性性相の理解の三種類の層位
３．天の父母様の男性と女性の格位
４．おわりに

１．はじめに

世界平和統一家庭連合（以下「家庭連合」）の共同創始者、韓鶴子総裁は去る 2013 年 1 月、存在の究極的起源となる唯一神、神様の名称を「天の父母様」と宣布した。また、2020 年 5 月には天の父母様を中心として、宗教だけでなく生の全領域を合わせる「天の父母様聖会（Heavenly Parent's Holy Community）」時代を新しく開門した。これらの一連の宣布の核心には「天の父母様」があり、それゆえに天の父母様聖会時代の概念を理解するためには、天の父母様の存在に対して明白な神学的理解が先行しなければならない。このような脈絡から、本論文は既存の家庭連合の神理解を再検討し、天の父母様聖会時代が宣布する父母としての神様についてより明瞭な理解を得ることに焦点を合わせている。

本論文は、家庭連合の神理解おいて「神相（Divine Image）」の核心である二性性相（Dual Characteristics）の中で陽性と陰性の二性性相に注目する。なぜならば、神様において陽性と陰性は各々「男性」と「女性」であり[1]、これはすなわち天の父母様の父性と母性となるためである。また、天の父と天の母の各位を論ずるにおいても性相と形状の二性性相よりは陽性と陰性の二性性相の観点から調べてみる必要がある。

既存の家庭連合の陽性と陰性の二性性相に関する理解は主に『統一思想要綱』を基礎にして性相と形状の「下位属性」という観点が主であった。ところが、このような理解は神様の唯一性を説明することはできても、神様の天の父、天の母としての格位を説明するにおいては限界があった。性相と形状の下位属性としての陽性と陰性は、人間の男と女、動物の雄と雌のような性を区分する範疇となることができないからである。このような脈絡から、本論文では、陽性と陰性の二性性相に関する理解を三種類の層位（layer）、すなわち１）実体の性相・形状全体の性格を決定する性としての理解、２）

[1] 世界平和統一家庭連合、『原理講論』（日本語版）（東京：光言社、1994）、47.

性相と形状の下位属性としての理解、そして３）高低、長短、強弱などのように相対的関係を結ぶすべての内容を包含した範疇的側面での理解に分けて説明を試みながら、陽性と陰性の二性性相に関する統合的理解を追求し、それによって天の父母様に関する完全な理解に接近しようと思う。[2]

２．陽性と陰性の二性性相の理解の三種類の層位

家庭連合での神様の陽性と陰性の二性性相に関する理解は、何よりも『原理講論』に基礎をおいている。『原理講論』は神様を説明する方式において、神様の属性をまず宣布した後、それを説明する演繹的方式ではなく、誰でも否認することが難しいこの世界の共通の特徴を通して被造世界を造られた神様の属性を説明するという帰納的方式を使用している。[3]『原理講論』がいう被造世界に普遍的に内在している共通事実は次の二つである。最初は、「存在しているものは、いかなるものであっても、それ自体の内においてばかりでなく、他の存在との間にも、陽性と陰性の二性性相の相対的関係を結ぶことによって、初めて存在」[4]することである。二番目は、存在するものはすべて、その内性と外形とを備えていて、「前者を性相といい、後者を形状と名づけ」[5]、「あらゆる存在が性相と形状による二性性相の相対的関係によって存在している」[6]というのである。この二つの共通事実に根拠をおいて、『原理講論』は結論的に、神様は「あらゆる存在の第一原因として」[7]、存在するすべてのものの主体的な性相と形状、陽性と陰性を帯びている「中和的主体」[8]として存在するという。

二つの二性性相、つまり性相と形状の二性性相と、陽性と陰性の二性性相の関係について、『原理講論』は次のようにいう。「神の本性相と本形状は、各々本陽性と本陰性の

---

[2] この主題に関する家庭連合内の研究はとても限られているので、本論文では家庭連合の経典および基本テキスト以外に朱裁完の次の論文を主要先行研究として参照した。朱裁完、「『原理講論』で二つの二性性相の相互関係に関する小考」『世界平和統一家庭連合思想研究Ⅲ』（忠南牙山：鮮文大学校出版部、2018）；朱裁完、「陽性と陰性の二性性相Ⅰ：『原理解説』と『原理講論』を中心として」、「陽性と陰性の二性性相Ⅱ：『統一思想要綱』を中心として」、『統一教思想研究Ⅱ』（忠南牙山：鮮文大学校出版部、2014）。

[3] もちろん、ここでは神様がこの世界を自身に似るように創造したという前提が内包されている。

[4] 世界平和統一家庭連合、『原理講論』、42.

[5] 世界平和統一家庭連合、『原理講論』、44.

[6] 世界平和統一家庭連合、『原理講論』、44.

[7] 世界平和統一家庭連合、『原理講論』、46.

[8] 世界平和統一家庭連合、『原理講論』、47.

相対的関係をもって現象化するので、神の本陽性と本陰性は、各々本性相と本形状の属性である」。[9]　実際、家庭連合の中でこの文章の解釈において明瞭ではない部分があったのが事実である。神様の「本性相と本形状が各々本陽性と本陰性の相対的関係をもっている」という言葉は、本性相や本形状の中に本陽性と本陰性の相対的関係であるということができる要素があるということなのか、そうでなければ、本陽性は本性相の属性であり、本陰性は本形状の属性だという意味なのかについて異見が存在した。[10]しかし、『統一思想要綱』は後者の可能性を排除し、前者に集中して説明しているので、家庭連合は一般的に前者の理解方式に従っている。

性相と形状の下位属性としての陽性と陰性

『統一思想要綱』は、陽性と陰性の二性性相を性相および形状の下位属性として理解する。すなわち、「陽性と陰性は、性相の属性であると同時に形状の属性である」[11]このような観点から『統一思想要綱』は、性相と形状を神様の「直接的な属性」として、陽性と陰性を「間接的な属性」[12]として表現したりもする。人間をはじめとする被造物も神様に似せて創造されたので、すべての個体は性相と形状を直接的な属性として、陽性と陰性を間接的な属性として備えている。ここで直接的なのか、間接的なのかという問題は「実体」の問題と関連が深い。すなわち、性相と形状は「被造物、個体、肉身をもった人間、物質的存在」を意味する「実体」の直接的な構成要素であるので、性相と形状自体も「実体としての性格」[13]を持つのに対して、陽性と陰性は性相と形状の下位属性であるので、それ自体が実体としての性格を持つことができない。言い換えると、性相と形状は存在の内性と外形としてそれ自体で実体であるが、陽性と陰性は、性相と形状の下位属性としてのみ存在するので、それ自体としては存在することができない。性相と形状が存在してこそ、陽性と陰性がその属性として存在するのであって、その反対の場合は成立することができないというのである。

---

[9] 世界平和統一家庭連合、『原理講論』、46.

[10] 朱裁完は、彼の論文「『原理講論』での二つの二性性相の相互関係に関する小考」で、この問題にとても分析的に接近する。彼の文章は、『原理講論』の全体的な文脈の流れ（神様と被造世界は性相と形状の関係なので、神様は男性格、被造世界は女性格という点を包含）だけをおいて見れば、陽性は性相の属性であり、陰性は形状の属性であるので、陽性と陰性の関係は性相と形状の関係と同一であるという説明がより自然であるという点をみせてくれる。朱裁完、『世界平和統一家庭連合思想研究Ⅲ』（忠南牙山：鮮文大学校出版部、2018）、197-218.

[11] 統一思想研究院、『統一思想要綱』（東京：光言社、2014）、40.

[12] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、40.

[13] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、41.

ところが、性相と形状の二性性相もそうであるが、神様の陽性と陰性の二性性相をきちんと理解するためには、被造世界に広がっている実体的例示を通して認識するしかない。最も良い例は神様に最も似た存在である人間である。人間の心と体、そして男性と女性は、神様の性相と形状、陽性と陰性を最も明確に見せてくれる表象である。したがって、神様の陽性と陰性が何であるかを知るためには、人間の男女を中心として深層的な分析が必要である。

このような脈絡から『統一思想要綱』は男性と女性の差異を明らかにすることに集中する。陽性と陰性が何であるかを男女の差異を通して表そうとするのである。人間の男性と女性は各々実体であるので、ここでも人間の男性と女性という実体に対して直接的に比較するのではなく、各々がもっている陽性と陰性の属性の差異を明らかにすることに力を注ぐ。男性であれ、女性であれ、人間は性相と形状の合性体であるので、『統一思想要綱』は男女の陽性と陰性の差異を性相と形状に分けて説明する。

まず、形状面において、男女の陽性と陰性の二性性相の差異は「量的」差異である。量的差異とは、簡単に言えば、人間の生殖器の差異をいうのである。人間の体（形状）において、陽性は隆起部や突出部を意味し、陰性は陥没部や孔穴部を意味する。一言で、陽性は飛び出した部分、陰性は中に入った部分を指すが、男性と女性の体はすべて、出た部分と入った部分があることが同一であるが、生殖器の差異故に男子は陽性的要素がより多く、女子は陰性的要素がより多い。したがって、形状において男女間の陽性と陰性は「量的差異」があるというのである。[14]

それでは、男女の心（性相）の差異はどうであるか？　体とは異なり、男女間の心の陽陰の差異は、「質的」差異だという。『統一思想要綱』によれば、心は情・知・意の三つの機能を備えているが、心の陽性と陰性の属性は、この三つの機能各々にわたって適用される。例を挙げると、心の意的機能において「積極的、攻撃的、創造的、軽率性」などは陽性に該当し、「消極的、包容的、保守的、慎重性」などは陰性に該当する。また、情的機能においても「愉快、騒がしい、喜び、興奮」などは陽性に該当し、「不快、静粛、悲しみ、沈着」などは陰性に該当する。[15]これは男女すべてに適用されるのである。男女に関係なく、人間の心ではこのように陽性と陰性の属性が調和を成すようになる。ただ男女の心の差異というものは、男女が上に列挙した属性を共にもっているとし

---

[14] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、43-44. 『統一思想要綱』では出てこないが、ここにもう一つさらに付け加えるなら、男女の体の陽陰の差異は、出ている部分と引っ込んでいる部分を結ぶ体の線においても違う。すなわち、男性は「男性的」な体の線を持っていて、女性は「女性的」な体の線を持っている。人体を深く観察する美術家の場合、この差異を誰よりもよく知っているであろう。私は、このような差異も男女の体がもっている陽陰の「量的差異」の範疇に包含しなければならないと見る。

[15] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、43.

ても、男性は「男性的」な陽性と陰性を、女性は「女性的」な陽性と陰性をもっているという点である。例を挙げると、情的機能で陰性に該当する悲しみを男性と女性がすべてもっているとしても、男性の悲しみは男性的な悲しみとして「悲痛（強い悲しみ）」に変わりやすく、女性の悲しみは女性的な悲しみとして「悲哀（か弱い悲しみ）」になりやすいという。[16] 同じ悲しみでも男性と女性にしたがって悲痛と悲哀に分けることを『統一思想要綱』は性相においての男女間の陽性と陰性の「質的差異」というのである。

この部分で『統一思想要綱』が提示する男女の心の属性が実際に男女の特性を反映するかという問題は扱わない。ここでは一旦、男女の心において陽陰の質的差異が「ある」ということだけを考えてみることにしよう。重要なことは、『統一思想要綱』がその質的差異を説明するにおいて、もう一つの陽性と陰性（男性と女性）の範疇を用いているという点である。

> 統一思想から見るとき、男子は陽性を帯びた「性相と形状の統一体」であり、女子は陰性を帯びた「性相と形状の統一体」である。したがって男子を「陽性実体」、女子を「陰性実体」と表現するのである（『原理講論』四八頁）。
>
> ここで特に指摘することは、男子を「陽性実体」というときの陽性と、女子を「陰性実体」というときの陰性が、表１―１で示される陽性と陰性とは必ずしも一致しないということである。すなわち、性相においても形状においても、表１―１で示される陽性と陰性の特性は男女間で異なっているのである。[17]

> 性相における陽性と陰性は、男女間において質的差異を表すのであるが、男子の陽性と陰性をまとめて男性的、女子の陽性と陰性をまとめて女性的であると表現する。したがってここに、「男性的な陽陰」と「女性的な陽陰」という概念が成立するのである。[18]

すなわち、男子は「男性的（陽性的）な陽陰」の性相と形状をもっていて、女子は「女性的（陰性的）な陽陰」の性相と形状をもっている。たとえ陽性と陰性という表現は同じだが、「陽性的（陰性的）な陽性と陰性」というとき、前の部分の陽性（陰性）と後ろの部分の陽性（陰性）は層位を別にして理解しなければならないことがはっきりとわかる。しかし、『統一思想要綱』は「男子を「陽性実体」というときの陽性と、女子を「陰

---

[16] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、44.

[17] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、43-44.

[18] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、45.

性実体」というときの陰性が」性相および形状の下位属性としての陽性と陰性と比較したとき、「必ずしも一致しない」とだけ言及するだけで、具体的な説明をしてはいない。この差異を知ることは、陽性と陰性の二性性相についての総体的な理解に接近するにおいてとても重要な要素であらざるをえない。実際、本論文はその空白を埋めることができる説明を提供することを主な目的としている。

性の区分としての陽性と陰性

実際に『統一思想要綱』が陽性的（陰性的）陽陰の性相と形状において「陽性的」と「陰性的」とは何かということについて説明をしていないわけではない。ただ、迂回的な説明方式をとっているだけである。すなわち、前に言及した通り、男子と女子の性相と形状においての質的量的差異に言及することにより「陽性的」と「陰性的」の説明の代わりとしようとしているのである。人間は誰でも陽性と陰性を属性とする性相と形状をもっているが、男子と女子の性相と形状においての質的、量的差異を論ずることにより、「男性的な陽陰の性相と形状」（男子）と「女性的な陽陰の性相と形状」（女子）での「男性的」と「女性的」が何であるかを明らかにしようとするのである。

もちろん男子と女子の質的、量的差異だけに言及するといっても、「男性的」と「女性的」の具体的概念を知ることができない。ここでは多少形式的な次元に限定して論議を進めるしかない。論議の便宜のために「陽性的（陰性的）な陽陰の性相と形状」というときの前の部分の陽性的（陰性的）を「陽陰①」で、その後ろの陽陰を「陽陰②」に分けて表記することにしよう。結論的に言えば、陽陰①は、陽陰②の全体的な性格を決定しているより上位の次元の包括的な概念である。陽陰①が陽性的（陰性的）であるならば、その存在の性相と形状の下位属性である陽陰②は陽性的陽性、陽性的陰性の属性を帯びるようになる。性相と形状がすべて陽性的陽性と陽性的陰性で成された存在を何と呼ぶであろうか？　まさに男子である。同じように、心と体がすべて陰性的陽性と陰性的陰性で成された存在は他でもない女子である。『統一思想要綱』は陽陰①と陽陰②を総合して男子という存在と女子という存在を説明しているのである。

私たちはここで一つの大きな示唆点を発見することができる。陽陰①は、陽陰②とは違い、性相と形状の下位属性の範疇を抜け出ているだけでなく、かえって性相と形状の全体的属性を決定して、「性別」の区分までつくりだしているという事実である。陽陰①は、陽陰②を規定する上位次元の性的属性なのである。男性的な心と男性的な体をもった存在は男子であり、女性的な心と女性的な体をもった存在は女子である。したがって、この「男性的」と「女性的」に内包されている陽陰①は、男子と女子の生理的（形象的）性と心理的（性相的）性すべてを規定する、より根本的な陽性と陰性の二性性相だということができる。

男子なので男性的陽陰の性相と形状をもっていて、女子だから女性的な陽陰の性相と

形状をもっているというのか？　あるいは反対に、ある人間が男性的（女性的）陽陰の性相と形状をもっているので、男子（女子）だというのか？　これははっきりと循環論理である。[19]しかし、『統一思想要綱』に従えば、人間は神様に似せて創造された結果的存在であるので、神様から創造されたように、つまり陽陰①の区分が与えられたように、陽陰②の属性をもつことは当然なことである。言い換えれば、男子として創造された存在は男性的属性を、女子として創造された存在は女性的属性をもつのである。もう一度反復するが、ここでは「男性的」と「女性的」の具体的意味や二つの間の「主体」と「対象」の関係についての論議は扱わない。現在の論理では、陽陰①が存在するということ、つまり「男性的」と「女性的」の差異が存在するという点だけで十分である。

陽陰①は、陽陰②とは異なり、実体的に分立することができる。すなわち、陽陰②は、性相と形状の下位属性であるので、陽性と陰性が常に不可分的に連合されているが、陽陰①は性別の区別であるので、男子と女子、雄と雌などとして陽性と陰性に分離することができる。だから、『統一思想要綱』は男子を「陽性実体」、女子を「陰性実体」と呼ぶのである。ここでの陽性と陰性は前に言ったように、陽陰②ではない陽陰①である。そして、『原理講論』の「存在しているものは、いかなるものであっても、それ自体の内においてばかりでなく、他の存在との間にも、陽性と陰性の二性性相の相対的関係を結ぶことによって、初めて存在するようになる」という言葉も「自体の内において」を陽陰②に、「他の存在との間にも」を陽陰①に（あるいは後に出てくる陽陰③に）区分して解釈することが好ましい。

さらに具体的に言うならば、『統一思想要綱』は、例を挙げると男子の男性的音声と女子の女性的音声が同じ音声（陽陰②）ではあるが、お互いを対比させてみるときに陽性と陰性の関係があるという。前に見た、悲痛と悲哀の関係がそうである。悲痛と悲哀どちらも悲しみではあるが、前者が男性的悲しみであり、後者が女性的悲しみであるので、両者の関係は陽陰①の観点から見るときに陽性と陰性の関係性をもつということである。「男女間の陽陰の質的差異は量的差異の場合と同様に…、男性と女性の関係が陽と陰の関係であることを意味する。」[20]これは男子と女子の男性性と女性性（陽陰①）は男子と女子の同一な陽陰②がお互いに陽性と陰性の関係をもつように規定するからである。

---

[19] 朱裁完は、男子の性向が主体的（男性的）であり、女子の性向が対象的（女性的）だという論理は次のように循環論理の誤謬に陥ってしまうと憂慮する。「男子が主体（陽性実体）である理由は男子の属性が主体的（陽性的）であるからであり、男子の属性が主体的（陽性的）である理由は、男子（陽性実体）が主体（陽性実体）であるからであるという論理は循環論理である」。朱裁完、『統一教思想研究Ⅱ』（忠南牙山：鮮文大学校出版部、2014）、83-84）

[20] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、46.

もちろん陽陰①が分離することができるということは、断絶されているという意味ではない。人間の場合、男子と女子はお互いを「先有条件」[21]として夫婦の因縁を結び、あたかも一つの生であるかのように調和を成して生きていくことが正道である。動物の雄と雌、植物のおしべとめしべ、分子の陽イオンと陰イオン、原子の陽子と電子なども同じである。[22]これは本来、存在の根源者、神様の男性と女性の二性性相の「中和」に陽陰①が由来しているからである。多様な層位の陽性実体と陰性実体はあたかも一つの体のように円満で円滑で調和した授受作用の中で一体を成して生きていかなければならない。

また、陽陰①は男子と女子の区分を明確にする役割をもつ。家庭連合は、すべての存在の内性（性相）と外形（形状）は似ていると見る。したがって陽陰①の観点から男女の外形の差異（量的差異）が存在するなら、内性においても差異（質的差異）が存在するようになる。ここで私たちは男子と女子の内面の質的差異についてあまりに性急に一般化を試みたり、典型的なステレオタイプを適用する必要はない。ただ、言わんとすることは、男女の内面の差異が存在するのは明らかであり、その差異は男女が相補的存在として調和を成して生きていくように導いていく貴重な契機となるという点である。万が一、このような陽陰①の区分がなかったなら、今日の一部フェミニストが生物学的な性の区分を無視し、社会的性だけを重視しながら、性的自己決定権を強調するように、男子と女子の区分を恣意的に解釈する傾向が増えるかもしれない。そのようになれば、性のアイデンティティの区分を恣意的に往来しながら、トランスジェンダー現象をつくったりもし、性的アイデンティティもまた脱構築しながら同性愛、両性愛などの現象を呼び起こしたりもするようになる。『統一思想要綱』の観点からはこのすべてのことが陽陰①の区分が弱くなる時に起きる現象であると解釈される。

要するに、陽性と陰性の二性性相は陽陰①と陽陰②すべてを考慮しながら理解することが望ましい。陽陰①は、性別の区分を含み考えていて、一つの存在の性相と形状の陽陰の属性を総体的に規定する上位次元の陽性の陰性の二性性相である。陽陰②は、性相と形状の下位属性であり、性相と形状自体の中で調和を呼び起こす下位次元の陽性と陰性の二性性相である。陽陰①は陽陰②の全体的性格を規定する。このように、陽性と陰性の二性性相は、上位次元の陽陰①と下位次元の陽陰②が共にかみ合わさっているので、どちらか一つを論議したとしてももう一つと関連付けて理解する必要がある。特に、陽陰①に焦点を合わせてこの宇宙全体を眺めてみるとき、すべての陽性と陰性の二性性相には性的な要素が包含されていることを発見するようになるであろう。

---

[21] ある一方の存在する理由がすでに相対的関係にあるもう一方にあるという意味である。

[22] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、171.

「すべての相対的関係の概念および実体」を意味する陽性と陰性

最後に、陽性と陰性の二性性相を理解する一つの層位を加えようと思う。それは「森羅万象の存在様相」に内在している陽性と陰性の二性性相についての理解である。すなわち、この宇宙全体に対比・対照をなして相対的関係にあるすべての概念および実体の関係を、陽性と陰性の二性性相として見る方式である。これを便宜上「陽陰③」と呼ぶことにしよう。

『原理講論』は陽性と陰性の二性性相についての説明で、初めは陽陰①に該当する男性と女性、雄と雌、おしべとめしべ、陽イオンと陰イオン、陽子と電子についての例を列挙して、その次に「雄しべや雌しべ、あるいは雄や雌もまた、各々それ自体の内部で、陽性と陰性の二性性相の相対的関係を結ぶことによって、初めて存在することができる」と述べて、陽陰②に該当する説明を続ける。そして、最後に次のような内容を加えている。

> 森羅万象の存在様相が、表裏、内外、前後、左右、高低、強弱、抑揚、長短、広狭、東西、南北などのように、すべて相対的であるのも、あらゆる被造物が二性性相の相対的関係によって、互いに存在できるように創造されているからである。[23]

上で挙げられている例はすべて存在自体を指しているのではなく、位置、強さ、長さ、幅、方向など多様な面で相対的に対比・対照される存在の属性の間の「関係様相」を指している。例を挙げると、「前後」の場合、「前」や「後」はそれ自体が存在ではなく、前と後ろ、あるいは先と後の関係にある、ある存在や事件の空間的、時間的概念を意味する。すなわち、「前後」はそれ自体が実体であるのではなく、実体に適用されることができる関係概念である。そして、「前」という概念は「後」という概念があってこそ成立するのであり、これは反対の場合も同じである。すなわち、前と後は、一方がなければ残りの一方も存在できない相補的概念であるので、この二つの組み合わせは偶然的ではなく、必然的である。全宇宙の数多くの存在はこのような存在の属性間の対比・対照される必然的「対」の概念的組み合わせによって巨大な調和をなして生きていく。

ところで、精神的概念と物質的実体は、統一思想の体系の中で見るとき、性相と形状の不可分の関係性をもっているので、存在の属性の関係的概念は概念だけで終わるのではなく、その概念を表象化している実体と不可分の関係性をもつ。万が一、長い短いが陽性と陰性の関係であるなら、長いものを表象化しているある物体と、短いものを表象化しているある物体も各々陽性と陰性と言うことができるのである。[24]　この点は『統

---

[23] 世界平和統一家庭連合、『原理講論』、43.

[24] 朱裁完、『統一教思想研究Ⅱ』、81.

一思想要綱』の「存在論」の次のような段落から確認することができる。

> 交響曲の演奏において、音の高低、強弱、長短、陽的な楽器と陰的な楽器の演奏など、いろいろな陽陰が調和して作用しているのと同様に、宇宙創造の過程においても、無数の陽陰の調和が作用してきたと見るのである。銀河系には約二千億の恒星があるが、それらは渦巻き状に配列されている。星の密なところが陽であり、まばらなところが陰である。地球には陸と海ができたが、陸が陽で海が陰である。山と谷、昼と夜、朝と夕、夏と冬なども陽陰の調和である。このように数多くの陽陰の調和が絡み合うことにより、宇宙が形成され、地球が形成され、生物が発生し、人間が出現したのである。[25]

上の引用文から山と谷、陸と海などは各々実体であるが、陽性と陰性の関係として描写されている。すなわち、高低、強弱、長短のような対比・対照される対の概念だけでなく、その概念が適用される実体も陽性と陰性の関係として見ているのである。この点は、「原相論」で陽性と陰性を性相と形状の属性とだけ、つまり陽陰②とだけ規定したこととは多少相いれない。[26]　東洋の易学が太陽と月を陽と陰と規定するのに対して、「原相論」はそれを否定しながら「太陽（個体）は性相・形状の統一体（実体）であって、太陽の光の『明るさ』が陽」であり、「月それ自体は性相と形状から成る個体（実体）であって、月の反射光の明るさの『淡さ』が陰」[27]だと言う。しかし、上の引用文を勘案してみるとき、太陽の光の明るさと月の反射光の淡さだけが陽性と陰性の関係ではなく、太陽自体と月自体も陽性と陰性の関係として見るのが『統一思想要綱』の全体的脈絡を考慮するときより適切なものであると判断される。

そうであるなら、陽陰③は、前で探ってみた陽陰①、陽陰②とどのような関係があるのだろうか？　一言でいえば、陽陰③は、陽陰①の性別の区分、陽陰②の性相と形状の下位属性という枠に制限を受けないで、相対的関係にある概念や実体すべてを陽性と陰性の二世性相とみる方式である。したがって、陽陰①がいう「男性的（陽性的）」と「女性的（陰性的）」、男子と女子、雄と雌、おしべとめしべ、そして陽陰②がいう心の情・知・意の明晰と模糊、愉快と不快、積極的と消極的、体の隆起部と陥没部、表面と裏面などはすべて陽陰③の多様な事例の一部となる。このような観点から見ると、陽陰③は、陽陰①と陽陰②すべてを包含した最も包括的陽性と陰性の二性性相の理解方式であるということができる。

---

[25] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、173.

[26] 朱裁完、『統一教思想研究Ⅱ』、89-90.

[27] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、41.

しかし、陽陰③が最も包括的だといって陽陰①と陽陰②を陽陰③の特殊な事例という程度だけに理解すれば、陽性と陰性の二性性相の本質を逃す愚を犯してしまう。『統一思想要綱』によれば、神様は自身に似せて、つまり「相似の法則」にしたがって人間と万物を創造し、この世界を創造する前に全創造の構想、青写真ということのできる「ロゴス（logos)」をまず心の中に抱かれた。この構想は最も基礎的な素粒子から始まり、最も高次元な人間に帰結したのではない。反対に、「神は創造に際して、心の中にまず性相と形状の統一体である人間を構想された。その人間の性相と形状から、順に一定の要素を捨象し、次元を低めながら、動物、植物、鉱物を構想されたのである」。[28]『統一思想要綱』はまた神様の人間構想について次のような説明を加えている。

> 神は人間の構想に際して、いくつかの種差を重ねながら構想されたのではない。一度にすべての属性（性相と形状、陽性と陰性）をもった人間を構想されたのである。しかも抽象的な人間ではなくて、具体的な個別相をもった人間、アダムとエバを心に描かれたのである。[29]

すなわち、この世界の創造は神様に最も似た人間始祖アダムとエバについての構想から始まったのである。これは、神様がアダムとエバ各自の性相と形状の側面だけではなく、陽陰①と陽陰②に該当する陽性と陰性の二性性相を中心として一定の要素を捨象して次元を下げながら動物（雄と雌)、植物（おしべとめしべ)、鉱物（陽イオンと陰イオン）を構想したということを意味する。したがって、陽性と陰性の二性性相にだけ焦点をおいてみると、この世界のすべての陽性と陰性の関係（陽陰③）はアダムとエバの陽陰①と陽陰②から始まったものだと言うことができる。素粒子の構想から始まって人間アダムとエバの構想に至ったのではないように、陽性と陰性の二性性相においても強弱、高低、長短のような最も単純な概念から出発して人間の男性と女性であるアダムとエバに至ったのではないというのである。

したがって、陽性と陰性の二性性相の核心は陽陰③ではない。陽陰③は、アダムとエバという神様のロゴスの典型から派生した結果に過ぎない。つまり、陽性と陰性をきちんと把握するためにはまず人間を中心として性別の区分を通して性相と形状の属性全般を規定する陽陰①と、それにしたがう性相と形状の下位属性である陽陰②をまず理解しなければならず、その次に陽陰①と陽陰②を基盤としてこの宇宙全体に展開された多様な実体的、概念的、象徴的相対関係を陽陰③で理解するのが望ましい。この点は神様の陽性と陰性の二性性相を理解するときも同じように適用することができる。すなわち、

---

[28] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、167.

[29] 統一思想研究院、『統一思想要綱』、176.

神様の陽性と陰性は何よりも陽陰①の男性と女性であり、これを根幹として陽陰②と陽陰③を連結して統合的に理解する必要がある。このような方式で陽陰①、陽陰②、陽陰③を総体的に把握するとき、私たち人間は神様とこの世界の陽性と陰性の二性性相の神秘に少し近づくことができると期待する。今までの論議を簡単に表で整理してみれば以下のようである。

<table>
<tr><th rowspan="2">区分</th><th rowspan="2">特徴</th><th colspan="3">陽性と陰性の区分</th></tr>
<tr><th colspan="2">区分</th><th>陽性</th><th>陰性</th></tr>
<tr><td rowspan="4">陽陰①</td><td rowspan="4">- 性別の区分
- 性相と形状全体の性格規定
- 最も根本的な陽性と陰性の二性性相</td><td colspan="2">人間</td><td>男性</td><td>女性</td></tr>
<tr><td colspan="2">動物</td><td>雄</td><td>雌</td></tr>
<tr><td colspan="2">植物</td><td>おしべ</td><td>めしべ</td></tr>
<tr><td colspan="2">素粒子</td><td>陽イオン</td><td>陰イオン</td></tr>
<tr><td rowspan="5">陽陰②</td><td rowspan="5">- 性相と形状の下位属性
- すべての個体は陽陰①から男性的あるいは女性的な陽性と陰性をもつようになる</td><td rowspan="3">性相</td><td>知</td><td>明晰</td><td>模糊</td></tr>
<tr><td>情</td><td>愉快</td><td>不快</td></tr>
<tr><td>意</td><td>積極的</td><td>消極的</td></tr>
<tr><td colspan="2">形状</td><td>隆起部</td><td>陥没部</td></tr>
<tr><td rowspan="8">陽陰③</td><td rowspan="8">- 相対的関係を成すすべての概念および実体
- ロゴスの典型であるアダムとエバの陽性と陰性（陽陰①と陽陰②）を基盤として展開</td><td colspan="2" rowspan="3">概念</td><td>長</td><td>短</td></tr>
<tr><td>高</td><td>低</td></tr>
<tr><td>強</td><td>弱</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="5">実体</td><td>陸</td><td>海</td></tr>
<tr><td>山</td><td>谷</td></tr>
<tr><td>昼(太陽)</td><td>夜(月)</td></tr>
<tr><td>男子</td><td>女子</td></tr>
<tr><td>師匠</td><td>弟子</td></tr>
</table>

表１．陽性と陰性の二性性相の理解の三つの層位

３．天の父母様の男性と女性の格位

今まで陽性と陰性の二性性相が何であるかを明白に把握するために三種類の層位で区分し各々について説明した。『原理講論』が創造主神様を説明するにおいて、この世

界の共通の特徴を把握した後、それを神様に適用する帰納的方式を使用しているように、人間と万物で共通に発見される陽性と陰性の二性性相の三種類の層位は私たちが神様の陽性と陰性の二性性相を理解するようにしてくれる認識の枠となる。この世界の中に陽陰①、陽陰②、陽陰③が内在しているなら、それらはすべて神様から始まったものであるので、神様の陽性と陰性を理解するとき、この三つの側面を等しく使用して理解する必要があるのである。

ところで、冒頭で述べたように、今まで家庭連合の中で神様の陽性と陰性の二性性相を理解する方式は主に陽陰②、つまり性相と形状の下位属性という側面に局限されていた。陽陰②の方式に集中するようになれば、性相と形状の統一体としての神様「本体」の唯一性はよく守ることができる。神様は本性相と本形状の統一体であり、「一から全存在」を創造した、ただ一人の創造主、神様でいらっしゃる。このような理解方式は神様を「父なる神」と呼ぶときも大きな無理がない。「父なる」という言葉は「母なる」という言葉と不可分の概念で対になっているので、神様を「父なる神」と告白することは神様がすなわち父母でいらっしゃることを意味するのである。父と母の中で代表性をもつ父とだけ神様を呼ぶことによって、神様は二つの存在ではない一つの存在としての唯一性を堅持することができ、父と呼んでも自体内に陽性と陰性をもっているので、陽陰②を中心とした理解に大きな無理はない。

しかし、問題はこのような既存の理解方式が、神様を「天の父母様」と告白する方式とうまく合わないという点である。天の父母様は天の父と天の母の格位を共に内包していて、天の父の格位は父としての性稟、つまり「父性」を、天の母の格位は母としての性稟、つまり「母性」をもっていると理解される。キーポイントは、既存の陽陰②を中心とした陽性と陰性の理解方式がそのまま天の父母様の父性と母性についての理解方式に引き継がれることができるのかということである。

結論から述べれば、陽陰②の陽性と陰性はそのまま天の父母様の父性と母性へと引き継ぐことはできない。性相と形状の下位属性としての陽性と陰性は、前の表１でも出てきたが、性相において明晰と模糊、愉快と不快、積極的と消極的などを意味する。これは一つの存在の中の陽性と陰性なので、各々を天の父の父性と天の母の母性として連結すれば問題が発生する。天の父は明晰で愉快で積極的な存在として、天の母は模糊とし不快であり消極的な存在として描写するしかないからである。これは人間の経験に立脚した父と母についての一般的な属性とも距離があるだけではなく、男性と女性の差別的認識を呼び起こすかもしれない深刻な問題の素地をもっている。

それならば、陽性と陰性の二性性相の側面から天の父と天の母の父性と母性をどのように理解しなければならないのか？　この問題は今まで看過されてきた陽陰①の観点で神様を天の父母様として眺め見るときに初めて解かれることができる。『原理講論』に明示されているように、神様において陽性と陰性の二性性相は「男性」と「女性」で

あり、これは根本的に被造世界の男子と女子、雄と雌のように性別の区分を表す陽陰①で理解しなければならない。すなわち、神様の陽性と陰性は根本的に人間男女の性相と形状の下位属性（陽陰②）の総体的性格を「男性的」「女性的」で規定してくれる性の根源なのである。

神様の男性と女性の二性性相をこのように陽陰①として理解するとき、私たちは神様が「男性的陽陰の性相と形状」と「女性的陽陰の性相と形状」をもった方であることを知るようになる。人間の場合、「男性的陽陰の性相と形状の統一体」はほかでもない男子であり、「女性的陽陰の性相と形状の統一体」は女子である。すなわち、神様の男性と女性の二性性相は根本的に神様が男性としての格位と女性としての格位を同時にもっていることを表す。陽陰①の観点で神様を眺め見れば、陽性と陰性の二性性相を性相と形状の下位属性とだけ見たときは隠されていた神様の男性（父）としての姿と女性（母）としての姿が初めて現れてくる。天の父母様の父性と母性は陽陰②ではない陽陰①の方式で眺め見なければならず、したがって天の父は「父性的陽陰の性相と形状の統一体」として、天の母は「母性的陽陰の性相と形状の統一体」として理解しなければならない。人間の男子がもつ性相と形状においてのすべての「男性的」属性は天の父に似ているのであり、人間女子がもつすべての「女性的」属性は天の母に似ているのである。このような脈絡から男子は天の父の実体であり、女子は天の母の実体であるという表現も可能である。

ただ、神様と人間が異なる点は、人間の場合、陽陰①が実体的に分立され、男子と女子が個別的な存在として分けられる反面、神様は万有の根本であり、陽陰①が分かれるのではなく一つに統一されている本体、つまり「天の父母(Heavenly Parent)」という点である。家庭連合が天の父母様を英語に翻訳するときに複数を用いないで単数を使った理由がまさにここにある。陽陰①は、陽陰②とは違い、性相と形状全体を規定し、男性または女性としての総体的人格（神様の場合、神格）を表す。男性的（父性的）陽陰の性相・形状の統一体の観点から見れば、神様は天の父の格位として現れ、女性的（母性的）陽陰の性相・形状の統一体の観点から見れば、神様は天の母の格位として現れる。文誉進はこのような内容と関連して、天の父母様の「二重格位」という表現を使ったことがある。[30]

ここで家庭連合の天の父母神観が二元論の危険に露出するのではないかという憂慮が出るかもしれない。この問いに答えるためには『統一思想要綱』の「実体」と二性性相と関連した内容にもう一度帰る必要がある。性相と形状の二性性相は、それ自体が実

---

[30] 文誉進、「両性平等回復の必要性：神様を天の父であり、天の母として理解すること」（韓国語版）、天一国学術苑創立総会および第 1 回学術シンポジウム(2016.08.22.)、396-397.

体である反面、陽性と陰性の二性性相はその実体の属性である。この点においては陽陰①と陽陰②は同一である。陽性と陰性の二性性相は層位が違ったとしても、それ自体が実体ではないのである。たとえ性を区分する陽陰①が性相と形状の下位属性（陽陰②）全般を規定するとしても、それは相変わらず実体（性相と形状の統一体）内で起きる陽性と陰性の二性性相の上位次元と下位次元間の関係であるだけである。したがって、天の父母様が陽陰①の次元で「男性的（父性的）」と「女性的（母性的）」の二つの属性を同時にもっているとしても、これが天の父母様が二名であるということを意味しない。

人間は男子と女子が個別的存在として分立されているので、天の父母様が一つの存在でありながらも男性性と女性性が一体を成しているという点を完全にはすべてを理解できないかもしれない。人間の認識にはいつも限界があるものである。それにもかかわらず、人間が天の父母様を最も近く理解することができる道は、神様に最も似た人間を通してである。天の父母様の男性と女性が分立された一人の男子と一人の女子が夫婦の縁を結んで子供を産んで家庭を成し、愛で完全に「一心同体」を成すとき、天の父母様の父性と母性に最も似た存在となることができる。最も似た存在とは、神と人間が愛の一体を成したという意味である。家庭連合はこれを「神人愛一体」[31]と表現し、神人愛一体の格位を成した人間始祖を人類の「真の父母」と呼ぶ。だから、家庭連合では、堕落した人間始祖アダムとエバを代身して来られた文鮮明･韓鶴子総裁を各々「ひとり子」「ひとり娘」、御夫妻が一体となった格位を「真の父母様」と呼び、侍る対象、信仰の対象として奉るのである。家庭連合の信徒は天の父の格位と天の母の格位に最も似た文鮮明・韓鶴子真の父母様の一心、一体、一念、一和、一核の生を通して天の父と天の母が完全に一つとなった天の父母様の格位を実感しながら、自らも真の家庭を成して真の父母の道を歩んでいくと誓う。

要するに、今まで家庭連合内で一般的理解として固まってきた陽性と陰性の二性性相についての理解、つまり性相と形状の下位属性という理解方式を再考し、男性（父性）と女性（母性）という上位次元の理解に高揚させるとき、天の父母様を原理的にもっと明確に把握することができるようになるだけでなく、天の父母様に人格的に心情的にもっと近く出会うことができるようになる。したがって、今後、天の父母様の陽性と陰性の二性性相は陽陰①と陽陰②、そしてさらには陽陰③の様相までを包括して総合的に把握することが要求される。

４．おわりに

今まで家庭連合は陽性と陰性の二性性相を理解するにおいて、性相と形状の下位属性

---

[31] 世界平和統一家庭連合、『天聖経』（日本語版）（ソウル：成和出版社、2017）、393-394.

という側面に焦点を合わせた。しかし、本論文では、陽性と陰性の二性性相に接近する観点を三つに区分して、より統合的な理解を試みた。最初は、男子と女子のように性を区分する陽性と陰性の側面であり、これは性相と形状全体の属性を規定する。二番目は、性相と形状の下位属性としての陽性と陰性の側面であり、性の区分にしたがって各存在は男性的陽性と陰性、あるいは女性的陽性と陰性をもつようになる。そして、最後は、すべての相対的関係を成す概念および実体をさす場合の陽性と陰性である。

最初の観点を本論文では「陽陰①」と呼び、陽性と陰性の二性性相の最も核心とみなした。神様の陽性と陰性の二性性相は「男性」と「女性」であり、「ペアシステム(pair system)」で成されたこの世界のすべての「男性的」と「女性的」の根本になるためである。男性と女性の相対的関係を根幹としたとき初めて陽陰②、陽陰③のすべての相対的関係が形成されることができる。これは神様のロゴスの観点から見るときもそうである。神様は、創造前にこの世界を構想されるとき、素粒子の単位から始めて最も高次元の人間を構想されたのではない。反対に、完成した男性（アダム）と完成した女性（エバ）をまず構想され、その人間の性相と形状から順に一定の要素を捨象して次元を下げながら動物、植物、鉱物を構想されたのである。したがって、陽性と陰性の二性性相においても、最も低い次元の概念や存在の相対的関係から始まったのではなく、アダムとエバの男性と女性の層位から陽性と陰性の下位層位が展開されたと見るのがふさわしい。だから、陽性と陰性の二性性相を理解するとき、陽陰①を中心にして陽陰②と陽陰③を統合的に理解することが必要である。

このように天の父母様の陽性と陰性の二性性相を全体的に眺めるならば、天の父母様に対する神学的理解を増進させることができるだけでなく、天の父母様とさらに人格的に出会うことができる道が開かれることができる。以前の理解方式では天の父と天の母の格位を原理的に説明するのに難しさがあったが、各々を男性的（父性的）陽陰の性相・形状の統一体、女性的（母性的）陽陰の性相・形状の統一体と理解することによって、その難しさが解消される。そして、男性的、女性的陽陰の性相・形状の統一体は、性の区分にしたがって各々の人格性を表すので、子女である人間が天の父と天の母にもっと人格的に近く出会うことができ、心情的関係を構築することができる道が開かれることができる。このように、陽陰①と陽陰②、そしてさらには陽陰③の様相までも包括して天の父母様の陽性と陰性の二性性相を把握するようになるとき、天の父母様聖会時代が要求する天の父母様との心情的関係および神学的理解の基礎をさらに堅固に準備することができると期待する。

参考文献

文誉進.「両性平等回復の必要性：神様を天の父であり、天の母として理解すること」.
　　天一国学術苑創立総会および第 1 回学術シンポジウム．2016.08.22.
世界平和統一家庭連合.『原理講論』．東京：光言社，1994.
世界平和統一家庭連合.『天聖経』（日本語版）．ソウル：成和出版社，2017.
朱裁完.『統一教思想研究Ⅱ』．忠南牙山：鮮文大学校出版部，2014.
朱裁完.『世界平和統一家庭連合思想研究Ⅲ』．忠南牙山：鮮文大学校出版部，2018.
統一思想研究院.『統一思想要綱』．東京：光言社，2014.